

神を死者として思い出すこと——ブルーメンベルクの「哲学者の神の過剰」について

下田和宣（京都大学）

本発表はブルーメンベルク『マタイ受難曲』（1988年）、とりわけその最終章である「哲学者の神の過剰」を取り上げる。まずそこで展開される議論を後期ブルーメンベルクの全体的な問題設定に位置づけることで、その章の議論の狙いを明確化する。そこから「神の想起」を軸に開かれる宗教哲学的思索の領野を示し、その独自性を明らかにしたい。

『マタイ受難曲』のテーマはキリストの受難物語と、バッハ「マタイ受難曲」を中心とした西洋の歴史におけるその「受容」の変遷を追跡することである。しかしそれは実証的な歴史記述ではない。まずはその記述の狙いを正確に判定するために、70年代後半以降に「非概念性の理論」として定式化されるブルーメンベルクの基本姿勢について確認することにしたい。

西洋哲学における神観念の受容史を主題化する『マタイ受難曲』『哲学者の神の過剰』の叙述はまさにその哲学的人間学に支えられている。そこでブルーメンベルクは、神秘家のみが触れることを許された臨在する神ではなく、とりわけ不在の神ないし神の不在化の哲学的諸相に着目する。そのなかでひとつの頂点となるのはニーチェにおけるいわゆる「神の死」である。ブルーメンベルクの分析によれば、ニーチェにおいて神は「死せるもの」として想起される。死者として想起される神という観念の成立において、神はすべての価値を担う（担っていた）ものへと過剰化する。ニーチェやシオランの説くニヒリズムは、このような神観念のエスカレーションと表裏一体の結びつきを持つとされる。

神の死ではなく、死者としての神という観念の出現に焦点を絞るブルーメンベルク的分析は、不在の受容という行為の背景にある期待の地平を可視化する。その地平こそ、変遷する歴史の流れにおいて経験の根源性を可能にする条件なのである。